



さらしな の 里



友の会だより

第22号

2010・春



御柱を諏訪社に奉納した後、神事を行う佐良志奈神社の氏子のみなさん（大谷芳文さん撮影）

佐良志奈神社の御柱祭

ことは数えて七年に一度、寅・申の年にある御柱祭の年。当地の佐良志奈神社でも執り行っている。幕末に当社の神職が諏訪大社にご奉仕していたことがあり、その縁で御分社を勧請し、境内に末社としてお祀りしたのが始まりといわれる。新しい祠に再建される前の祠には「嘉永七年」の文字が刻まれ、当時から当社の御柱祭もあったようだ。日本に黒船が迫り幕府に開国を要求してきたころだ。

青少年の健全育成などを目的に実行委員会を設立し、神社総代、若宮・芝原両区の役員、祭典係、PTA、育成会、分館、安協、消防団などの方に取り組んでいただく。今回の実行委員長は、昨年度神社主任総代を務めた芝原区の大谷茂安氏。両区から一本ずつ出していたく御柱は若宮区は水井壽光氏、芝原区は大谷正平氏が御献木くださった。三月六日に「山出し」が行われた。樹齢約七十八十年の赤松で、目通り直径約四十センチ、長さ九メートルの立派な御柱に切りそろえられた。当地の御柱祭は四月十日、境内では、若宮のあんずやかたくりの花を觀賞し抹茶でもてなす「かたくりまつり」が早くからにぎわっていた。昼過ぎ、「里曳き」出発地点である芝原の安置所に約三百人が集合し、午後一時花火を巨図に芝原若宮の御柱の順にスタート。沿道では多くの氏子の皆様から声援や接待、木やりの後押しを受けて力をもらった。途中、芝原の集積所で若宮・芝原の順に行列を変更し、午後四時前には神社境内に到着した。

「建て御柱」はオザワレンタル、原崎総備、滝沢建設といった地元の職人さんが重機を用いて建てる。以前は人力で建てたが、平成十年の祭で柱を倒し子供が軽いけがを負う事故があった。安全に建てている。こうして諏訪社の前に二本の御柱が奉納されると、神事を行い花笠音頭などの芸能を奉納し祭りは終了する。直会殿で宴が始まり、子供たちは菓子袋をもらい、露店で豚汁や焼きそばを食べ家路につく。大人になりどこで生活しても家族や地域の人に見守られ楽しんで祭があったことを忘れないでほしい。

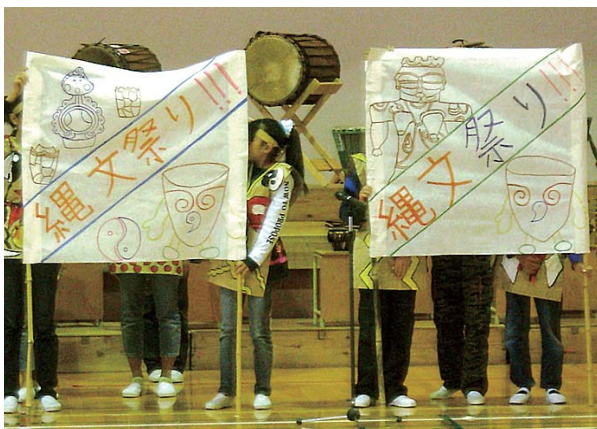
（佐良志奈神社宮司・豊城憲和）

更級小で縄文集会

新型インフルエンザの感染拡大が予想された昨年十月初め、さらけの里縄文まつり実行委員会の協議で「縄文まつり」は中止となり、翌週、児童にその旨を伝えました。

すると、「校長先生、なんとかできるようにして」と直訴する子もいて、参加はこれが最後と楽しみにしていた六年生も残念な様子でした。学年の役割が決まっている縄文まつりでは今年しか体験できない活動もあり、校内でささやかですが学習発表会を「縄文集会」と名づけ行うことにしました。

六年生が司会進行する中、豊穰儀礼を担当するはずだった五年生は、食べ物に感謝する表現として、縄文まつりの様子の一部を再現してお供えをしました。五年生は縄文時代からの食べ物についてよく調べ説明し、実際に採ってきたドングリ、サワガナ（など）や



た。四年生の作った炭も供えました。一年生は育ててきたエゴマで作った

自分たちが育ててきたお米を供えまし

「更級かたりべの会」が文部科学大臣表彰

羽尾区の住民らでつくる「更級かたりべの会」が、子供たちへの読書普及に貢献する取り組みをしてきたとして本年度、文部科学省から「子供の読書活動優秀実践団体」に選ばれ、文部科学大臣表彰を受賞。信濃毎日新聞（4月29日）でも紹介されました。

同会は一九九四年、婦人会の活動をきっかけに結成しました。十年ほど前から更級小学校で定期的に本の読み聞かせを続けています。また、郷土史研究家だった故塚田哲男さんの原案をもとに創作した「羽尾の米はうんまいよ」「お薬師さまの目洗

石」など当地にまつわる民話のほか、姨捨伝説を題材にした朗読劇などを保護者や児童にも加わってもらい地域内外で披露しています。

文科省表彰を記念し、姨捨伝説の朗読劇などを「更級人」風月の会」の六月二十六日の会場で披露してもらいます。午後六時半から、場所は明徳寺。観劇料は不要ですが、終了後に開く懇親会に参加希望の方は一四〇〇円をお支払いください。人数を把握したく予約が必要です。

信濃毎日新聞



近藤市長（左）に文部科学大臣表彰受賞を伝える更級かたりべの会会員

読書普及の取り組み 文科省

「更級かたりべの会」受賞

クッキーを発表、二年生、三年生は縄文まつりの「わくわく広場」でやるはずだった「的当て」や木の実を使ったゲームを紹介しました。四年生は更に「縄文芸能村」に向けて練習したオリジナル劇を発表。昔話をアレンジした脚本だったり、はまり役の役者？のみなさんが登場しての堂々とした演技で大好評でした。

六年生は自分たちで考えた縄文まつりの「マーク」と「旗」（中央の写真）を発表し、「来年はぜひ使って」と参加したかった気持ちを込めて伝えました。その後は十三名の有志でジャンベ演奏、指導の先生も見違えるよううまくなったと絶賛の演奏でした。終わりに来年はもつとすばらしい「縄文まつり」になるよう「縄文の歌」を歌って気持ちを一つにしました。

（更級小学校長・伊藤可主也）

先住民の悲しみと文化の多様性



さらけの里歴史資料館で三月七日、「先住民の世界 国際政治・経済の鍵を握る先住民」と題する講演会がありました。

演者は放送大学教授で文化人類学者のスチュアート・ヘンリ（本田俊和）さん。「先住民」という言葉の響きからロマンを感じていた私でしたが、今回の講演をお聞きして、実際は深い問題や大きな苦しみや悲しみがあることを学びました。先住民のみなさんは自然との共生の中で独特の伝統文化を育み今日まで大地に根ざして生活してきましたが、後から来た民族にその生活を脅かされるようになってきました。しかし、現在は彼らの文化の多様性を世界中が認め、彼らの人権を守り共に生きていく方向にあるというお話でした。

ユーモアを交え、分かりやすい言葉で伝えてくださり、感謝です。

（戸倉区・小林喜美子）



さらけの里友の会創作部副部長の中村ツル子さんが一月二十二日、お亡くなりになりました。中村さんは縄文まつりの「芸能村」では芝原地区のお仲間とチームを結成、ユニークな芝居や衣装などで会場を湧かせてくださいました。ご冥福をお祈りいたします。

羽尾にもあった御柱祭



羽尾地区の堂城山の麓にもかつて諏訪社があった。このため羽尾でも御柱祭が行われていたときがあり、明治二十九年・三十五年・四十一年の『諏訪社御柱祭掛明細帳』などによって祭りの全容がうかがえる。

明治二十五年の五月三日に行われた御柱祭を見ると、松の木二本を北村孝三郎・森八郎右工門が寄付し、御幣軸一對を上水民治が寄付している。賄い費は本郷区各戸が分担して五円六十銭集まった。このほか若者衆は日ごろの祭り交流関係から、近隣村はもちろんはるか遠村からも助成を受けた。

御柱祭は整然とした隊列を組み、地区一円をめぐる。隊列は氏子総代二名・祭典取締役二名・祭典係十一名が先導役を務め、続いて御幣軸を立てた御柱を頭領二名のもとに二十二名の引き手のかげ声で引き回す。そして二本の御柱にはそれぞれ扇をもった六名の囃子方が飛び乗り、扇を大きく振り、引き手と調子を合わせる。

坂道になると、頭領の鳶唄(羽尾に伝わる職人唄)が声高々と響き、一層力が入る。この唄はめでたい即興詩が延々と続き職人唄の見せどころだ。「冠着山からぼたもち(ぼたもちや)投げりゃ/羽尾ナ一仙石ひと粘り」などの唄が羽尾に伝わるが、これも歌われていたと思われる。

御柱の後ろには、和合・本田・須坂の軍楽隊六十数名の鼓笛が鳴り響き、村人を鼓舞する。そして数十名の奴芸の行列が七ツ道具を掲げ「エイッサー ホイツァ」とかけ声でやってくる。一橋徳川家の大名行列を踏まえた練り歩きで、明治維新の時、羽尾村が道具を譲り受け使った。さらに羽尾神楽の笛太鼓で獅子舞が続く。着飾った男女の踊り連が最後尾に花を添える。この踊りは若者衆が当時の稲荷山町芸者宿で毎晩、稽古したようだ。

諏訪社に着くのが午後三時ごろ。「建て御柱」が終了すると二斗の酒を振る舞い、村人は酔いしれた。そして恒例の若者衆の花火大会だ。この花火は半端ではない。上山田村や若宮区・稲荷山日新堂より四寸玉・五寸玉を四十発購入、それに硫黄・硝石など調達して、籠を掛けたケヤキの筒で打ち上げた。さらに飛竜型竹筒花火数十発を、須坂区・五加村内川・村上村・郡村の有志などの寄付と自作を含め、大空に打ち上げた。夜になると提灯の明かりの中で、演芸を披露し、最後は全員踊りあかしたようだ。

なお、羽尾の諏訪社は明治末期に出された政府の「一村一社令」によって冠着社に合祀され、現在は郷嶺山にある。上の写真は拝殿の後方、それまで旧羽尾村内にあった祠を合祀するため集めたもので、右から二つめの祠が諏訪社ではないかと思う。

「枕草子」にある蟻通し難題



「ホラ貝に糸を通せ」というのは姨捨伝説の中の難題だ。ホラ貝以外にもサザエや管などさまざまな物に糸を通す難題となつて各地に伝わり「蟻通し」系難題と呼ばれるが、平安時代中期を生きた清少納言の随筆「枕草子」にも記されていることを存じだろうか。

昔、都に住む四十歳以上の者がみな殺されていたころ、唐の帝が日本を討ち取ろうと三つの難題を持ちかけたが、孝行な中将の家を隠れていた親がすべての難題を解いた。

三つめの難題は「七曲がりに曲がりくねった小さい玉に糸を通せ」というもので、親は大きな蟻の腰に細い糸をつけて穴に入れ、穴の反対側に蜜を塗るよりに言った。中将がためしみると、蟻は穴を通り抜けた。その後、老人は都に住むことを

許され、中将の親は蟻通明神となつて祀られた、という話だ。

ちなみに現在、把握できたもので大阪府に一社、和歌山県に二社の蟻通神社があり、知恵の神様として親しまれている。このうち二社は京都と熊野三山を結ぶ熊野古道の近くにあるようだ。平安時代に上皇が始めた熊野詣ではのちに武士や庶民に広まり、人々の参詣する様子を「蟻の熊野参り」と言つたそうだ。

「蟻通し」系難題については、日本固有説と伝来説があるが、「枕草子」よりも古い時代の中国の五、六世紀の殷芸という人の編んだ「小説」という本には孔子が陳の国で九曲がりの玉に糸をつなぎ、蟻が出なければ煙でいぶせばよいと、桑摘み娘に教えられたと書かれている。

「枕草子」は唐が日本に難題を出す、「小説」は陳国の大夫が孔子に難題を出す。さらに七曲がりと九曲がりの難題を解く人物・糸を通すのに蜜を使うか、重ねて煙でいぶすのかといったところが異なるが、蟻を使って糸を通し難題を解く大筋は同じなので、わたしは中国伝来説が優勢だろうと思う。

さらしなの里歴史資料館では、以上の蟻通し難題を含む姨捨伝説の説話集を作りました。販売もしています。

二元さらしなの里歴史資料館 スタッフ・濱田景子

ウサギ狩りの思い出～1枚の写真から

おらほの冠着

22



昭和三十一年（一九五〇）の三月六日は、更級中学校の行事の一つであるウサギ狩りの当日でした。参加者は猟友会のみなさん、更級中の先生と生徒、およそ三百五十人ほどでした。

五十四年も前のことであり、記憶も定かではありませんが、場所は羽尾五区の上で、現在のJ R篠ノ井線の上方だったと思います。厳冬の二月は過ぎていましたが、山は積雪も多く冬でした。

しかし、春の訪れは目の前にあり、みな元気よくウサギを追い出したり他へ逃げるのを防いだりする役割の「勢子」として、道のない山を腰まで雪につきりながら進みました。他のクラスの生徒は灌漑用の溜池に落ちて大変な騒ぎになりました。

狩りの成果はたったの一羽でしたが、みな意気揚々と学校へ戻りました。ここに載せてある写真の左下、棒にぶら下がっているのが、そのウサギです。右側にいるのが担任の小川先生（飯山市在住）で

独身であり馬力もありました。また我々も戦後十年と半年が過ぎた中、現代の立派な防寒着があるでなく、それにも負けずみな仲良く頑張っていました。写真中央の豊城巖君（さらしなの里友の会会長）だけが良家の子息である感じを受けました。

翌日か翌々日か不明ですが、給食のスープの中に一センチぐらいの肉が入っており、よくかみしめて食べました。

ウサギ狩りは、我々中学一年生にとつて、最初で最後になってしまいました。町教育委員会、PTA、学校当局の打ち合わせで決定されたものと思えます。我々の歩行中や銃弾の危険などを考えて、中止となったのではないのでしょうか。

この写真の中ですでに複数の方が、天国へ旅立ちました。級友のご冥福を祈りながら、思い出にひたり、更級の教えを胸にゆつくりと歩き続けます。

（若宮区・柳澤俊勝）



この四月から新たに松本英二（館長・中央）、西澤奈津子（学芸員・右）、伊部久仁子（スタッフ）の三名がお世話になります。歴史と自然が身近にある施設で働くことができ、とても幸せに感じています。学びの毎日ですが、友の会、地域の皆様のご指導・ご協力をいただきながら、当館が多くの皆様に親しまれ利用されるよう頑張ります。

編集後記 今号は更級地区の御柱祭の様子をたっぷり紹介しようと考えました。数えて七年に一度という貴重なタイミングです。羽尾区にも御柱祭があったとは知りませんでした。

編集委員会では誌面構成を大筋決めた後に、「更級かたりへの会」の文部科学大臣表彰のニュースが飛び込んできました。誌面にさらしなの里の躍動感が生まれました。

ウサギ狩りの写真をお持ちの方がいると聞いたときは、うれしかったです。ウサギまでしっかりと映っています。この笑顔の中学一年生が斜面を駆け回っていた光景が浮かんできました。

縄文時代から始まる当地の伝統文化の発掘、紹介に取り組んできた学芸員の翠川泰弘さんは、今春から文化財係で新たな任務に就いています。

編集・発行

さらしなの里友の会たより編集委員会

事務局・さらしなの里歴史資料館

〒三八九・〇八二二

長野県千曲市大字羽尾二四七の一

電話 〇二六（二七六）七五一

Fax 〇二六（二六）四一六一